

ルデーニャの原始宗教』（一九二二年）と『神』（一九二二年）。当初は一九一五年に出版予定）がそれにあたる。最高存在研究はアンドリュウ・ラングと、ラングの説を受けたヴィルヘルム・シュミットの原始一神教への批判へと繋がり、シュミットとの論争は一九五〇年代まで続いた。論争のポイントは「最高存在は一神教的な神であるか否か」である。シュミットは最高存在を一神教的な神と同一と捉え、論理的因果的思考をその発生原理とし、最高存在の属性とは創造性であるとした。一方、ペッタツツォーニは、最高存在は一神教的な神ではないという立場に立ち、空想力―神話創造力をその発生原理とし、属性として全知を指摘した。ペッタツツォーニはヴィーコに基づき人間精神における空想力と思维を区分し、前者に基づくものが最高存在、後者に基づくものが一神教的な神であると考えていた。その上で、歴史的にみて後に出現したキリスト教的な神観念を原始社会へ押しつけているとしてシュミットやコッパースらの神学的前提を批判し、地理的文化的環境との関わりで最高存在を考察したのである。この最高存在研究の方向性はペッタツツォーニの死後、弟子のアンジェロ・ブレリチとウーゴ・ビアンキに受け継がれた。

シュミットとペッタツツォーニによる最高存在研究は、宗教民族学を模索した宇野圓空（『宗教民族学』岡書院、一九二九年）、民族学「歴史文化学派」に傾倒した棚瀬襄爾（『民族宗教の研究』畝傍書房、一九四四年）、シュミットのもとで学んだ岡正雄らを通じて、日本にもたらされた。なかでも棚瀬はシュミットとペッタツツォーニの説を詳細に分析し、シュミットの

最高存在は「絶対的」、ペッタツツォーニのそれは「相対的」であるとした上で、「全智性の分析に於いてはペッタツツォーニはシュミットに優る。シュミットは全智性をあまりに安価に帰結し過ぎている。」（棚瀬襄爾「原文化の至上神の属性に就いて――シュミットとペッタツツォーニの学説を中心にして」『民族学研究』一三、日本民族学会、一九四八年、五一頁）と書いている。一九三〇年代から四〇年代にかけて、日本の宗教民族学はシュミットの強い影響下にあったが、ペッタツツォーニの仕事も確実に受け入れられていた。日本の事例をもとに着手された最高存在研究は、再び日本に戻されたのである。

パネルの主旨とまとめ

安藤 礼二

一九世紀後半にヨーロッパに誕生した比較宗教学と二〇世紀初頭に日本で確立された民俗学は起源を共有し、相互に密接な関係を持ったものではなかったのか？ 歴史と伝統の異なる諸文化が衝突し世界が一元化された時代になつてはじめて、集団として生きる人間の普遍性と固有性が探究されることが可能になった。宗教学という新たな学問を提唱したマックス・ミュラーのもとには南條文雄、高楠順次郎という日本からの留学生たちがおり、民俗学を創出した柳田國男と折口信夫はジェイムズ・ジョージ・フレイザーの『金枝篇』を読み込んでいた。ヨーロッパと日本は共振していたのだ。大正末、柳田が自身の学問を集大成するために創刊した雑誌は、『民俗』ではなく『民族』と名づけられた。二つのミンゾクガク、エスノロジーとフ

オークロアは不可分なものと考えられていた。

雑誌『民族』では、デュルケム派の宗教社会学の理論が精力的に紹介され、ヴィルヘルム・シュミットの文化圏説が一つの主導的な原理となっていた。マルセル・モースに由来するマナと、シュミットの論争相手として登場したラッファエーレ・ペッタッツォーニの最高存在(至上神)が、折口信夫の古代学を構成する二つの極として現れ出てくるのも『民族』以降のことである。モースやペッタッツォーニにとっても、極東の列島に残された文化は特権的な研究の対象となった。本パネルは、ペッタッツォーニの宗教学を研究する江川、モースの社会学を研究する溝口、折口の民俗学を研究する安藤が集い、ヨーロッパの比較宗教学と日本の民俗学の起源を問い直し、近代というグローバル化の時代が可能にした人文諸科学、宗教学、人類学、社会学、民族学もしくは民俗学といった新たな学問の歴史性、およびその可能性と不可能性をあらためて検討し直すために企画された。

各発表の後、コメンテータの関一敏よりパネルの根幹に関わる本質的な問題提起がなされた。まずはパネルのタイトルにもなっている「共振」という術語について。事後的にまとめられた単なる学説史ではなく、同時代に身を置き、実現されなかったものも含めて様々な可能性を発生論的に追求する思想史の構築という点ではきわめて魅力的ではあるが、その内実をもう少し整理する必要があるであろう。会場からも「共振」と個人的な関係性をどう区別するのかという質問が投げかけられた。続いてヨーロッパと日本における「神」について。柳田や折口が

なによりもまず問題としたのは神を宿らせる「もの」(神の依代)であり、ヨーロッパ的キリスト教的な超越神自体ではない。最高存在との類似点ばかりでなく相違点を明確にすることによって、「共振」を真の「比較」へと拡張していくことが可能になるであろう。会場からもペッタッツォーニの最高存在と一神教的な神との同一性と差異性、さらには日本における最高存在の有無やその歴史性について質問がなされた。

最後に、モースの「供儀論」について。相互に密接な関係を有すると思われる未完の博士論文『祈禱』をどのように位置づけるのか。つまり、供儀という手業の儀礼と祈禱という口頭の儀礼との関係は、モースにとつてどのように考えられていたのか。さらには、モースの出自とも重なり合う「供儀論」の重要な主題、ユダヤの問題が、シルヴァン・レヴィを介してインドと接合されたとき、そこには一体何が起こったのか。ユダヤの宗教、あるいはヴェーダの宗教と「贈与論」はどのような関係を持つのか、あるいは持たないのか。会場からは柳田と折口の両者と深い関係を保ち、モースに師事した松本信広についての質問がなされた。コメンテータからのコメント、会場からの質問のいずれも大変貴重なものであり、それらに答えるような形で、今後、「共振」の起源をミユラーやフレイザーにまで遡り、帰結をエリアーデやレヴィストロースにまで展開していきたいと考えている。